

殺菌消毒薬(特殊絆創膏を含む)

製品群No. 54

ワークシートNo.34

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化					
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	濫用にお よぶ 留意性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効果効果	
		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
殺菌 消毒 成分	アクリノール 液	グラム陽 性、陰性菌に 有効で、特に 連鎖球菌、 ウェルシュ 菌、ブドウ球 菌、淋菌に対 し、静菌及び 殺菌作用が ある。作用機 序は、生体で アクリジニウ ムイオンとな り細胞の呼吸 酵素を阻害す るといわれて いる。				頻度不明(塗 布部の疼痛、 発赤、腫脹等 潰瘍、壊死)	頻度不明(過 敏症)				・大量服用時 には、悪心、嘔 吐、腹痛、下 痢、肝機能障 害・外用に のみ使用し、 内服しないこ と		0.05~0.2w/v%の液として 使用する。	化膿局所の消 毒、泌尿器・産 婦人科術中術 後、化膿性疾 患(せつ、よう、 扁桃炎、副鼻 腔炎、中耳炎)
殺菌 消毒 成分	エタノール	消毒用エタ ノール(ヤ クハン)、 OTCとして 使用されて いるのは「消 毒用エタ ノール」と同 じ濃度	本剤は、使用 濃度において 栄養型細菌 (グラム陽性 菌、グラム陰 性菌)、酵母 菌、ウイルス 等には有効で あるが、芽胞 (炭疽菌、破 傷風菌等)及 び一部のウイ ルスに対する 殺菌効果は 期待できな い。エタノー ルの殺菌力 上の最適濃 度については、その試験 方法により一 定しないが、 通常70%と称 してよく、こ の濃度にお いては皮膚に 対して拡散及 び揮発性も適 度で、表皮を 損傷すること もなく、無害 である。			頻度不明(刺 激症状)	頻度不明(過 敏症)	損傷皮膚及び粘 膜(刺激)			・経口投与しない こと ・過量投 与・全身の熱感 、味覚・嗅覚機能 の低下、顔面紅 潮、発汗、悪心 、嘔吐、急性胃 炎、マロリーワ イス症候群、口 渇、利尿、痛覚 閾値の上昇、呼 吸促進、心搏亢 進、血圧下降、 多幸感、眩暈、 身体失調、歩行 困難、急性アル コール性ミオパ チー、記憶障害、 感情不安定、代 謝性アシドーシ ス、低血電、体 温低下、脱水、 失禁、肝機能障 害、呼吸抑制、 昏睡(エタノール の血中濃度が0.4 ~0.5%で呼吸停 止が起こる)、催 眠剤との同時服 用や頭部外傷の 合併にも注意す る。	・同一部位に 反復使用する 場合には、 脱脂等による 皮膚荒れを 起こすことが ある。広範 面又は長期 間使用した 場合には、蒸 気の吸入に 注意する	本品をそのまま消毒部位 に塗布する。	手術・皮膚の消 毒・手術部 位(手術野)の 皮膚の消毒・ 医療用具の消 毒

殺菌消毒薬(特殊絆創膏を含む)

製品群No. 54

ワークシートNo.34

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	I 評価の視点	用法用量	効能効果
							症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	適量使用・誤使用のおそれ				
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	適量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	用法用量	効能効果
殺菌消毒成分	塩化ベンザルコニウム 0.1w/vsチアミトール水	本剤は使用濃度において、栄養型細菌(グラム陽性菌、グラム陰性菌)、真菌等には有効であるが、結核菌及び大部分のウイルスに対する殺菌効果は期待できない。イオン界面活性剤であるので、表面張力を低下させ、清浄作用、乳化作用等を示す。作用機序は、陰電荷を帯びる細菌に陽電荷を帯びる塩化ベンザルコニウムが菌体表面に吸着・累積され、菌体タンパクを変性させ殺菌作用をあらわす。												

殺菌消毒薬(特殊絆創膏を含む)

製品群No. 54

ワークシートNo.34

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
殺菌消毒成分	塩化ベンゼトニウム	ハイアミン液:塩化ベンゼトニウム10w/vv	芽胞のない細菌、真菌類に広く抗菌性を有し、グラム陽性菌には陰性菌よりも低濃度で効果を示す。一方、結核菌及び大部分のウイルスに対する殺菌効果は期待できない					強度不明(過敏症)							<ul style="list-style-type: none"> 原液は皮膚・粘膜炎に付着及び眼に入らないように注意する。 炎症または易刺激性の部位(粘膜、創傷面、陰股部等)への使用時は低濃度・経口投与しないこと。 密封包装、ギプス包装、パックに使用すると刺激症状があらわれることがあるので、使用しないことが望ましい。 深い創傷又は眼にしようする場合は希釈液は注射用蒸留水か滅菌精製水を使用 	<ul style="list-style-type: none"> 全身吸収による筋脱力をおこすおそれがある。 粘膜炎、創傷面又は炎症部位に長期使用は広範囲に使用しない。 		<ul style="list-style-type: none"> ①通常石けんで十分に洗浄し、水で石けん分を十分に洗い流した後、塩化ベンゼトニウム0.05~0.1%溶液(本剤の100~200倍希釈液)に浸して洗い、滅菌ガーゼあるいは布片で拭拭する。術前の手洗の場合には、5~10分間ブラッシングする ②手術前局所皮膚面を、塩化ベンゼトニウム0.1%溶液(本剤の100倍希釈液)で約5分間洗い、その後塩化ベンゼトニウム0.2%溶液(本剤の50倍希釈液)を塗布する ③塩化ベンゼトニウム0.01~0.025%溶液(本剤の400~1,000倍希釈液)を用いる ④塩化ベンゼトニウム0.01%溶液(本剤の1,000倍希釈液)を用いる ⑤塩化ベンゼトニウム0.025%溶液(本剤の400倍希釈液)を用いる ⑥塩化ベンゼトニウム0.02%溶液(本剤の500倍希釈液)を用いる ⑦塩化ベンゼトニウム0.1%溶液(本剤の100倍希釈液)に10分間浸漬するか、または器具に消毒する際には、器具を予め2%炭酸ナトリウム水溶液で洗い、その後塩化ベンゼトニウム0.1%溶液(本剤の100倍希釈液)中で15分間煮沸する ⑧塩化ベンゼトニウム0.05~0.2%溶液(本剤の50~200倍希釈液)を布片で塗布・拭拭するか、または噴霧する 	<ul style="list-style-type: none"> ①手指・皮膚の消毒 ②手術部位(手術野)の皮膚の消毒 ③手術部位(手術野)の粘膜の消毒 ④皮膚・粘膜の創傷部位の消毒 ⑤感染皮膚面の消毒 ⑥産洗浄 ⑦結核菌の洗浄 ⑧医療用具の消毒 ⑨手術室・病室・器具・器具・物品などの消毒
殺菌消毒成分	オキシドール	オキシドール	殺菌消毒作用:使用濃度において栄養型細菌に対して殺菌作用を示すが、その作用は緩和で持続性が無い。発泡による機械的洗浄作用がある。		空気塞栓		適用:口腔粘膜刺激			瘻孔、挫創等本剤を使用した際に体腔にしみ込むおそれのある部位				<ul style="list-style-type: none"> 易刺激性の部位に使用する場合には、正常の部位に使用する場合よりも低濃度とする。 深い創傷に使用する場合の希釈液としては注射用水か滅菌精製水を用い、水道水や精製水を用いないこと。 外用にのみ使用し、内服しないこと 	<ul style="list-style-type: none"> 長期間又は広範囲に使用しないこと 		<ul style="list-style-type: none"> ①原液のままあるいは2~3倍希釈して塗布・洗浄する ②原液のまま塗布・滴下あるいは2~10倍(耳料の場合、時にグリセリン、アルコールで希釈する)希釈して洗浄・噴霧、含嗽に用いる ③原液又は2倍希釈して洗浄・拭拭する ④10倍希釈して洗口する 	<ul style="list-style-type: none"> ①創傷・潰瘍の殺菌・消毒 ②外耳・中耳の炎症、鼻炎、咽喉炎、扁桃炎等の粘膜の炎症 ③口腔粘膜の消毒 ④及び根管の清掃・消毒 ⑤菌の清浄 ⑥口内炎の洗口 	

殺菌消毒薬(特殊絆創膏を含む)

製品群No. 54

ワークシートNo.34

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				スイッチ化等に伴う使用環境の変化
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期間又は広範囲に使用しないこと			
殺菌成分	クレゾール石ケン液「ヤクハン」、クレゾール石ケン液を使用した						頻度不明(過敏症)	損傷皮膚				過量投与(16mL未満服用時) 悪心、嘔吐、下痢、口乾、食道・胃結核の腐食に伴う灼熱感と疼痛、粘膜白色変色、咽頭・喉頭浮腫、上気道の狭窄、頭痛、めまい、(16mL以上服用時) 吐血、食道潰瘍、下血、痙攣、筋線維性痙攣、腱反射消失、せん妄、興奮、不穏、瞳孔縮小、体温低下、代謝性アシドーシス、メヘモグロビン血症、貧血、活血、血圧低下、チアノーゼ、心筋炎、不整脈、ショック、呼吸麻痺、肺水腫、昏睡、心停止、肝障害、腎障害(急性尿管管壊死による)、皮膚に付着した場合、白色または茶褐色の化学熱傷を認める。・経口投与しないこと・眼に入らないようにすること・希釈する水にアルカリ土金塩塩、重金塩、第二鉄塩、酸類が存在する場合、変化する可能性がある。常水で希釈すると次第に混濁して沈殿を生ずることがあるが、このような場合は上澄み液を使用。			①クレゾールとして0.5~1% (クレゾール石ケン液として1~2%) ②クレゾールとして1.5% (クレゾール石ケン液として3%) ③クレゾールとして0.1% (クレゾール石ケン液として0.2%) 炎症又は易刺激性の部位に使用する場合には、正常の部位に使用するよりも低濃度とする	①手指・皮膚の消毒 手術部位(手術野)の皮膚の消毒 医療用具の消毒 手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒 ②排泄物の消毒 ③腫の洗浄	

殺菌消毒薬(特殊絆創膏を含む)

製品群No. 54

ワ-グシートNo.34

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果			
	評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ		適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)				使用方法(誤使用のおそれ)		スイッチ化等に伴う使用環境の変化
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	症状の悪化	適応対象の症状の判別				使用量以上	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ						
殺菌消毒成分	塩酸クロルヘキシジン	グルコン酸塩として:5%ヒビテン液	抗菌作用(in vitro試験)・広範囲の微生物に作用し、グラム陰性菌には低濃度でも迅速な殺菌作用を示す。・グラム陰性菌には比較的濃度で殺菌作用を示すが、グラム陽性菌に比べ抗菌力に幅がみられる。・芽胞形成菌の芽胞には効力を示さない。・結核菌に対して水溶液では静菌作用を示し、アルコール溶液では迅速な殺菌作用を示す。・真菌類の多くに抗菌力を示すが、全般的に細菌類よりも抗菌力は弱い。・ウイルスに対する効力作用機序・作用機序は十分には解明されていないが、比較的濃度では細菌の細胞膜に障害を与え、細胞質成分の不可逆的漏出や酵素阻害を起こし、比較的高濃度では細胞内の蛋白質や核酸の沈着を起こすことが報告されている。			ショック(0.1%未満)	0.1%未満(過敏症)				・クロルヘキシジン製剤過敏症の既往歴・脳、腎臓、耳(内耳、中耳、外耳)(聴神経及び中枢神経に対して直接使用した場合は、難聴、神経障害を来すことがある。)、・肺、膀胱、口腔等の粘膜面(ショック症状の発現が報告されている。)、・産婦人科用(産・外陰部の消毒等)、泌尿器科用(膀胱・外性器の消毒等)には使用しない。・眼に使用しない					・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。・外用にのみ使用する。・眼に入らないように注意する。		本品は下記の濃度(グルコン酸クロルヘキシジンとして)に希釈し、水溶液又はエタノール溶液として使用する。効能・効果 用法・用量:①手指・皮膚の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)(通常時:0.1%水溶液(30秒以上) 汚染時:0.5%水溶液(30秒以上)) ②手術部位(手術野)の皮膚の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈)(0.5%エタノール溶液) ③皮膚の創傷部位の消毒 0.05%水溶液(本剤の100倍希釈)(0.05%水溶液) ④医療用具の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈)(通常時:0.1%水溶液(10~30分)汚染時:0.5%水溶液(30分以上)) 緊急時:0.5%エタノール溶液(2分以上) ⑤手術室・病室・家具・器具・物品等の消毒 0.05%水溶液(本剤の100倍希釈)(0.05%水溶液)			

殺菌消毒薬(特殊絆創膏を含む)

製品群No. 54

ワークシートNo.34

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化						
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ					重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく留意性					適応禁忌	慎重投与	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)
評価の視点	薬理作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの											
殺菌消毒成分	ポビドンヨード イソジンスク ラブ (75mg/mL) 液剤	抗殺菌作用、 抗ウイルス作 用を有する			ショック、アナ フィラキシー 様症状(0.1% 未満)	0.1%未満 (接触性皮膚 炎、そう痒 感、灼熱感、 皮膚潰瘍、血 中甲状腺ホル モン値 (T3、T4値等) の上昇ある いは低下な どの甲状腺 機能異常)、 新生児に使用 し、一過性の 甲状腺機能 低下を起こ したとの報告	0.1%未満 (過敏感症)			本剤又はヨウ素に 対し過敏症の既往 歴	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	指傷・創傷皮膚 及び粘膜には使 用しないこと。経 口投与しないこと	妊婦中及び 授乳中の婦 人には、長期 にわたる広 範囲の使用 を避けること	手指・皮膚の消毒:本剤の 適量を用い、少量の水を 加えて摩擦し、よく泡立た せたのち、流水で洗う。 手術部位(手術野)の皮膚 の消毒:本剤を塗布する か、または少量の水を加 えて摩擦し、泡立させたの ち、滅菌ガーゼで拭う。	手指・皮膚の 消毒、手術部 位(手術野)の 皮膚の消毒
殺菌消毒成分	ポビドンヨード イソジン液 (100mg/mL) 液剤	抗殺菌作用、 抗ウイルス作 用を有する			ショック、アナ フィラキシー 様症状(0.1% 未満)	0.1%未満 (接触性皮膚 炎、そう痒 感、灼熱感、 皮膚潰瘍、血 中甲状腺ホル モン値 (T3、T4値等) の上昇ある いは低下な どの甲状腺 機能異常)、 本剤を新生 児に使用し、 一過性の甲 状腺機能低 下を起こした との報告、ポ ビドンヨード 製剤を腔内 に使用し、血 中総ヨウ素値 及び血中無 機ヨウ素値が 一過性に上 昇したとの報 告、本剤を妊 婦の腔内に 長期間使用 し、新生児に 一過性の甲 状腺機能低 下があらわ れたとの報 告、ポビドン ヨード製剤を 腔内に使用 し、乳汁中の 総ヨウ素値が 一過性に上 昇したとの報 告	0.1%未満 (過敏感症)		本剤又はヨウ素に 対し過敏症の既往 歴	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	指傷・創傷皮膚 及び粘膜には使 用しないこと。経 口投与しないこと	妊婦中及び 授乳中の婦 人には、長期 にわたる広 範囲の使用 を避けること	手指・皮膚の消毒:本剤の 適量を用い、少量の水を 加えて摩擦し、よく泡立た せたのち、流水で洗う。 手術部位(手術野)の皮膚 の消毒:本剤を塗布する か、または少量の水を加 えて摩擦し、泡立させたの ち、滅菌ガーゼで拭う。	手術部位(手術野)の皮膚 の消毒、手術部位(手術 野)の皮膚の消毒、手術部位 (手術野)の粘 膜の消毒、皮 膚・粘膜の創 傷部位の消 毒、熱傷皮膚 面の消毒、感 染皮膚面の消 毒	

殺菌消毒薬(特殊絆創膏を含む)

製品群No. 54

7-クシートNo.34

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)		
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果
殺菌消毒成分	「純生」マ ーキュロク ロム 本薬は水溶 液中でHgイ オンを解離し ている。皮膚、 粘膜に塗布 すると、この イオンが細菌 のSH基を有 する酵素と結 合して、これ を不活性化さ せることによ り、消毒効果 をあらわす。 ぶどう球菌、 連鎖球菌、肺 炎球菌、淋菌 などの細菌に 対し静菌作用 をあらわすが、 細菌の芽胞 (炭疽菌、破傷 風菌など)に 対する効果は 期待出来ない。	併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			外用にのみ使用 すること。眼に入 らないようにす ること。使用量 はできるだけ 必要最小量に とどめること。 深い創傷に 使用する場合は 希釈液としては、 注射用水か滅菌 水を用い、水道 水や精製水を使 用しない希釈す る。 水にアルカリ土 金属、重金属、 第二鉄塩、酸 類、ヨウ素等が 存在する場合、 変化することが あるので注意。	長期・広範 囲に使用で 水腫中薬を 起こすこと あり	皮膚表面の一般消毒に は、2%液を、創傷・潰瘍 の殺菌・消毒には0.2~2% 液を用いる。いずれも症 状に応じて1日1~数回患 部に適用する。	皮膚表面の一 般消毒、創傷・ 潰瘍の殺菌・ 消毒
ヨウ化カリウ ム	内服のみ												
ヨウ素	カデックス軟 膏0.9%	本剤は、ヨウ 素による殺菌 作用並びにカ デキソマーが 有する滲出液 等の吸収効果 により潰瘍 治癒促進効果 を示す。				0.1~1%未 滅(疼痛、刺 激感、皮膚炎 (発疹、水疱、 発赤など)、そ う痒)、新生児 に他のヨウ 素系製剤を使 用し、甲状腺 機能低下症 を起こしたと の報告、腫 内に他のヨウ 素系製剤を使 用し、血中 無機ヨウ素値 及び血中総 ヨウ素値が上 昇したとの報 告、本剤はヨ ウ素含有製 剤であるの で、多量投与 及び長期連 用時には甲 状腺機能の 変動に注意 する		ヨウ素過敏症	甲状腺機能に異 常、重症の熱傷、 腎不全、新生児、 妊婦又は妊娠して いる可能性のある 婦人及び授乳中の 婦人(長期・広範 囲)	外用にのみ使用 し、経口投与しな い。眼科用に使 用しない	妊婦又は妊 娠している可 能性のある 婦人及び授 乳中の婦人 には長期に わたる広範 囲の使用を 避ける	潰瘍面を清拭後、通常1日 1回、患部に約3mmの厚さ に塗布する。(直径4cmあ たり3gを目安に塗布す る。) 滲出液の量が多い 場合は、1日2回投与する。	潰瘍、皮膚潰 瘍(熱傷潰瘍、 下腿潰瘍)

殺菌消毒薬(特殊絆創膏を含む)

製品群No. 54

ワークシートNo.34

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ		D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化				
	ヨウ素	プレボダイン ソリューション 有効ヨ ウ素 1g/100mL	・使用濃度にお いて、芽生 型細菌(グラム 陰性菌、グラム 陽性菌)、結核菌、 真菌、一部の ウイルスに有効 である。・細菌、 真菌に対する殺 菌効果、結核菌 に対する効果に 認められる。			アナフィラキ シー様症状 (0.1%未満)	0.1%未満 (0.1%未満) 過敏症		妊娠中及び授乳 中の婦人への長 期にわたる広範囲 の投与	本剤またはヨウ素 に対し過敏症の既 往歴、甲状腺機能 に異常、重症の熱 傷、新生児、腫内 投与、妊婦の腫内 長期投与(新生児 に一過性の甲状腺 機能低下)			眼に入らないよう 注意。外用のみ に使用する	妊娠中及び 授乳中の婦 人への長期 にわたる広 範囲の投与 で先天性甲 状腺機能低 下症の乳児、 溶液の大量 かつ長時間 の接触によっ て皮膚変色、 接触皮膚炎		1本剤を塗布する。2本 剤を患部に塗布する。	1手術部位(手 術野)の皮膚 の消毒、手術 部位(手術野) の粘膜の消毒 2皮膚・粘膜の 創傷部位の消 毒、熱傷皮膚 面の消毒	
組 織 修 復 成 分	アラントイン	配合剤のみ																
局 所 麻 酔 成 分	塩酸ジブカイン	ベルカミン 注、表面麻 酔類似と考 え使用	感覚・求心神 経繊維のNa+ チャネルを遮 断することにより局所麻酔 作用を発現する。効力、持 続性、毒性い ずれも最大級 の局所麻酔薬 であるが、より 効力を強める ために局所鎮 痛以外の目的 にはエビネフ リンを添加して 用いる		振盪、痙攣等 の中毒症状 (頻度不明)	ショック(頻度 不明)	頻度不明(眠 気、不安、興奮、 霧視、眩暈、悪 心、嘔吐等)	頻度不明(過 敏症)	本剤に対し過敏症 の既往歴	本人又は両親、兄 弟に気管支喘息、 発疹、蕁麻疹等の アレルギー反応を 起こしやすい体質。 高齢者。妊婦又は 妊娠している可能性 のある婦人。						使用に際し、目的濃度の 水性注射液または水性液 として使用する。適宜増減 する。仙骨麻酔:0.05~ 0.1%注射液にエビネフリン を添加したものをを用い、 通常成人10~30mgを使用 する。伝達麻酔(基準最 高用量:1回40mg):0.05~ 0.1%注射液にエビネフリン を添加したものをを用い、 通常成人3~40mgを使用 する。浸潤麻酔(基準最 高用量:1回40mg):0.05~ 0.1%注射液にエビネフリン を添加したものをを用い、 通常成人1~40mgを使用 する。表面麻酔・耳鼻咽 喉科領域の粘膜麻酔に は、1~2%液にエビネフ リンを添加したものをを用 い、噴霧または塗布する。 ・眼科領域の麻酔には、 0.05~0.1%液にエビネフ リンを添加したものをを用い、 通常成人には1~5滴を点 眼する。・尿道粘膜麻酔 には、0.1%液にエビネフ リンを添加したものをを用い、 通常成人男子10~20mg、 女子3~7mg・膀胱粘膜 麻酔には、0.025~0.05% 液にエビネフリンを添加し たものをを用い、通常成人 10~20mg・局所鎮痛に は、0.025~0.05%液を用 い、適量を使用する。 歯科領域麻酔:0.1%注射 液にエビネフリンを添加し たものをを用い、伝達麻酔・ 浸潤麻酔には通常成人1 ~2mg	仙骨麻酔、伝 達麻酔、浸潤 麻酔、表面麻 酔、歯科領域 における伝達 麻酔、浸潤麻 酔	

殺菌消毒薬(特殊絆創膏を含む)

製品群No. 54

ワークシートNo.34

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 等に伴う 使用環境 の変化						
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応薬歴	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果
局所麻酔成分	リドカイン キシロカイン液「4%」塩酸リドカイン表面麻酔に類似のため使用	神経阻のナトリウムチャンネルをブロックし、神経における活動電位の伝導を可逆的に抑制し、知覚神経及び運動神経を遮断する局所麻酔薬である。表面・浸透・伝達麻酔効果は、塩酸プロカインよりも強く、作用持続時間は塩酸プロカインよりも長い。	意識障害、痙攣(強度不明)	ショック(強度不明) 頻度不明(眠気、不安、興奮、霧視、眩暈、悪心、嘔吐)	頻度不明(過敏症)	本剤の成分又はアミド型局所麻酔薬に対する過敏症の既往歴。	高齢者又は全身状態が不良。心刺激伝導障害。重症の肝機能障害又は腎機能障害。幼児、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人。				過量投与で中毒症状が現れる。症状として中枢神経系(不安、興奮、意識消失、全身痙攣など)、心血管系(血圧低下、徐脈、循環虚脱など)が現れる。 ・眼科(点眼)用として使用しないこと。注射用として使用しない。			塩酸リドカインとして、通常成人では80~200mg(2~5mL)を使用する。なお、年齢、麻酔領域、部位、組織、体質により適宜増減する。 幼児(特に3歳以下)では低用量から投与を開始。	表面麻酔
血管収縮成分	塩酸ナファゾリン 0.05%プリピナ液「チバ」、塩酸ナファゾリンの配合剤しかなかったため、硝酸ナファゾリンの点鼻薬を用いた	血管平滑筋のα-アドレナリン受容体に直接作用して血管を収縮させる。アドレナリンより強い末梢血管収縮作用を有し、作用持続時間も長い(ウサギ耳設血管)。	MAO阻害薬(急激な血圧上昇)		頻度不明(過敏症)	本剤の成分に対し過敏症の既往歴、2歳未満の乳幼児(ショック)、MAO阻害剤の投与を受けている(急激な血圧上昇)	冠動脈疾患、高血圧症、甲状腺機能亢進症、糖尿病、交感神経作用薬による不眠・めまいなどの既往、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、小児	連用又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充血を起すことある。急性充血期に際して使用するか又は適切な休薬期間において使用すること。			眼科用として使用しないこと。適量投与により、主な全身作用として、血圧上昇と二次作用として、冠動脈血がみられる。幼・小児では過量投与により、顕著な鎮静があらわれ、発汗、徐脈、昏睡等の全身症状があらわれやすい。連用・頻回投与により顆粒球減少、反応性の低下、局所粘膜の二次充血を起すことがある。			通常、成人鼻腔内には、1回2~4滴を1日数回、咽頭・喉頭には1回1~2mLを1日数回塗布又は噴霧する。なお、年齢、症状により適宜増減する。局所麻酔剤1mLあたり0.05%液2~4滴の割合で添加する。	上気道の腫瘍患の充血・うっ血、上気道粘膜の表面麻酔時における局所麻酔剤の効力持続時間の延長
抗ヒスタミン成分	α-マレイン酸クロルフェニラミン	外用の添付文書無し													

しもやけ・あかぎれ用薬

製品群No. 55

ワークシートNo.35

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	I スイッチ 化等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果	
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づ く留意性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象 の判別に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの								
血行促進成分	酢酸トコフェ ロール	外用しないの で、ユベラ錠	微小循環系 の賦活作用 を有し、末梢 血行を促す。 膜安定化作 用を有し、血 管壁の透過 性や血管抵 抗性を改善す る。抗酸化作 用を有し、過 酸化脂質の生 成を抑制する。 内分泌系の 賦活作用を 有し、内分泌 系を正常に			0.1~5%未 満(便秘、胃 部不快感)、 0.1%未満 (下痢)	0.1%未満 (過敏症)					末梢循環障 害や過酸化 脂質の増加 防止の効能 に対して、効 果がないの に月余にわ たって激然と 使用すべき ではない。		錠 剤 通常、成人には1回1~2 錠(酢酸トコフェロールとし て、50~100mg)を、1日2 ~3回経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。	1. ビタミンE欠 乏症の予防及 び治療 2. 末梢循環障 害(間歇性跛行 症、動脈硬化 症、血栓性静 脈炎、糖尿病 性網膜症、凍 瘡、四肢冷感 症) 3. 過酸化脂質 の増加防止
	トウガラシ	トウガラシチ ンキを使用				頻度不明(刺 激感、疼痛)		ひび、創傷皮膚及 び粘膜炎				原液で使用しな い。入浴直後の 使用は避ける 腫又は眼の周囲 に使用しない		①通常、トウガラシチンキ として、10~40%を添加した 液剤、軟膏剤、硬膏剤又は ハップ剤を1日1~数回 局所に塗布する。 ②通常、トウガラシチンキ として、1~4%を添加した 液剤を1日1~数回局所に 塗布する。	皮膚刺激剤と して下配に用 いる。 ①筋肉痛、凍 瘡、凍傷(第1 度) ②育毛
	ニコチン酸ベ ンジル	なし													
角質軟化・皮膚保護成分	オリブ油	日本薬局方 オリブ油												軟膏、硬膏、リ ニメント剤など の基剤として 調剤に用いる。 皮膚、粘膜 の保護に用い る。	
	グリセリン	グリセリン												・洗眼液の調 剤に用いる。ま た、溶剤、軟膏 基剤、湿潤・粘 滑剤として調 剤に用いる。 ・局所保護薬 ・外用として 皮膚、粘膜 面を保護、軟 化する目的 で、口唇の亀 裂、ひび、あか ぎれ、皮膚の あれなどに用 いる	

しもやけ・あかぎれ用薬

製品群No. 55

ワークシートNo.35

リスクの程度 の詳備	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
		相互作用	併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
ビタミンA	ザーネ軟膏	モルモットの 実験的角化 症に対する実 験において、 我皮の新陳 代謝を高め、 ケラチン形成 を抑制するこ とにより過角 化症に効果を 発揮することが 認められて いる。				0.1～5%未 濁 (紅斑、そう 痒) 0.1%未濁 (発疹)							本剤は眼には使 用しないこと。		1日2～3回患部に塗擦す る。	角化性皮膚疾 患(尋常性魚鱗 癬、毛孔性苔 癬、単純性批 癩疹)
ワセリン	黄色ワセリ ン	局方から・黄 色であるほ か、白色ワセ リンと同じ規 格である。				頻度不明(接 触皮膚炎)										軟膏基剤とし て調剤に用い る。また、皮膚 保護剤として 用いる。
	白色ワセリ ン(局方から) プロベト	局方から・中 性で、刺激性 がほとんどな く寒暖により、 粘稠度があまり 変わらず、 植物性又は 動物性油脂 のように光、 湿気によって 酸敗すること が少ない安定 な優れた軟膏 基剤である。 ・白色ワセリ ンは黄色ワセ リンをさらに 脱色したも ので本質的に相 違はない。				プロベト・頻 度不明(接触 皮膚炎)							プロベト 眼科用 の基剤として使 用する場合は、 調製後滅菌処理 をすること。 白色ワセリン 吸 水性と、皮膚へ の浸透性が少な く、粘着性が強 い。ろう、ステア リルアルコール 、ラノリンなどを添 加すれば吸水性 は増加する。ま た、発赤 発疹 、そう痒等の過 敏症状があらわ れた場合には 使用を中止す ること。 ・ときに、漂白操 作が不完全のた め、刺激性が黄 色ワセリンより強 いことがある。			プロベト・眼科 用軟膏基剤、 一般軟膏基剤 として調剤に 用いる。また、 皮膚保護剤と して用いる。 白色ワセリン: 軟膏基剤とし て用いる。また 皮膚保護剤と して用いる。下 界との接触 及び水分の蒸 散を遮断でき るため、創傷 面及び肉が面 の保護や手足 のひび、あか ぎれにそのま ま薄く塗布す る。
鎮 痛 成 分	塩酸ジフェ ンヒドラミン	外用はなし ジフェンヒド ラミンはあり ーレスタミン コーワ軟膏	アレルギーを 塗布または皮 内注射したと きに起こる発 赤、発疹、そ う痒などのア レルギー性皮 膚反応は、本 剤の1回塗布 により著明に 抑制される。			頻度不明(過 敏症)							使用部位 眼の まわりに使用し ない。		通常、症状により適量を1 日数回、患部に塗布また は塗擦する。	尋麻疹、湿疹、 小児ストロフル ス、皮膚そう痒 症、虫さされ

しもやけ・あかぎれ用薬

製品群No. 55

ワークシートNo.35

リスクの程度 の評価	評価の視点	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 添用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の悪化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化								
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの							使用量に上	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				
炎症成分	グリチルレチン酸	デルマクリン軟膏	グリチルレチン酸は急性炎症に対する抗炎症作用(浮腫抑制-ラット、肉芽腫抑制-ラット、抗紅斑-モルモット)を有する。抗炎症作用は主成分であるグリチルレチン酸の化学構造がハイドロコチゾンの化学構造に類似しているところによると推定される。					5%以上又は頻度不明(過敏症)							眼科用として使用しない			通常、症状により適量を1日数回患部に塗布または塗擦する。	湿疹、皮膚そう痒症、神経皮膚炎	